

恩師粵王先生亡き今思ふこと（五）

坏 博康

粵王先生、費盧傑（フアルージャ） 激戦の先を憂ふ

平成二十七年六月二十二日

平成十六年四月、伊拉克（イラク）戦争「大規模戦闘終結宣言」後最も激しい市街戦と呼ばれし費盧傑（フアルージャ）の戦闘開始す。同地は先の灣岸戦争以来反米感情最悪の地としてサダム・フセイン派の牙城となる。既に前年四月の米軍作戦による地域住民犠牲者多發を機に、米軍撤退要求運動は激化し同地に於る米伊拉克統治は困難に直面す。平成十六年三月に生ぜし所謂黒水社（ブラックウォーター）事件とその後の事態混迷を受け、米軍、遂に同地の叛亂武装勢力への大規模集中攻撃を決せり。

粵王先生、御身を震はせつつ、孫子の兵法「九死篇」にある「死地」を引き給ひて曰く、米軍は今や死地にあり。最早引く能はず、激しく撃つて出づるのみ。而も敗北は許されず。今後、米兵犠牲者多數續出する事態とならば、米國內の反戦氣運は一擧に高まらん。亦、反戦氣運の高揚を見越して撤兵する事態とならば、即ち越南戦争と同様の結果を自ら齎すこととならん。さらに、此の激戦に敗北し限定的にせよ撤兵する事態に至るも亦、同様の結果を招くこと必至ならん。今や集中攻撃に出でて勝利する外なし。米國の本氣を以てせば勝利せんとは信ずれども、萬一敗北を喫し米軍の伊拉克よりの全面又は大部撤退の事態とならば、彼國の対外政策は爾後長きに亘り孤立主義の支配するところとならん。斯かる情勢に於て、我國最大の關心事は、彼國が中東のみならず亞細亞よりも軍事的に撤するや否やの一點に盡く。米國の亞細亞よりの軍事的撤退といふ最悪の事態のみは必ず沮止せざるべからざるなり。即ち、費盧傑の戦、當に日本の命運を左右すべし。噫、我、夜も安んじて眠る能はず、と。

爾來十一年、費盧傑は今や「イスラム國」なる武装テロ集團の占據するところとなるも、幸なる哉、米現政權の亞細亞再調整戰略の維持により先生の憂ひ給ひし最悪の事態は未だ生ずるなし。

小生、是迄幾多の憂國之士を知るも、先生の外未だ嘗て身を震はせて日本の行く末を憂ふるを知らず。先生の御苦惱、杞憂といふ勿れ。先見之國士ならではといふべし。

（平成二十七年七月十八日受附）